

週刊アサヒ芸能の目次に見る性風俗と現代社会

Manners and customs of sexual behavior and contemporary society seen as contents of weekly Asahi public entertainments

1K03A111-2 氏名 首藤甲子郎

指導教員 主査 寒川恒夫先生 副査 礒繁雄 先生

序章

今回私が論文のテーマにしてきたことは、週刊アサヒ芸能の目次から様々な社会の動向と共に移り変わってきた性風俗の歴史・スポーツなどのジャンルを年代ごとにピックアップし調査するというものだ。週刊アサヒ芸能の創刊号から現在に至るまで各年代別の目次から社会の動向・法律の改正などと照らし合わせながら昔と今の性風俗がどの様に変化してきているのか性風俗に対しての人間心理などを踏まえながら調査していく。さらには、どうして、アサヒ芸能に限らずどの週刊誌でも性風俗とスポーツ関連記事が掲載されているのかも調査した。また、暴力団関連の記事についてもいつごろから掲載されだしたのか。週刊誌(主にアサヒ芸能)の広告が社会へもたらす問題点ということも調査してみた。

第一章週刊アサヒ芸能とはいかなるものなのかということから始まり、創刊までの歴史・何を目的としどの世代をターゲットにしながら発行部数を増やしていったのか。またどの様なジャンルを主として掲載してきているのかを中心に調べてみた。

第二章

アサヒ芸能に見る芸能面の変化を目次を参照し調査してみた。昔と違い他社との競争が激化してきた近年ではスキャンダルが持ち上がった芸能人などに対し報道のためなら人権すら無視するなどといった過激なものと変わってきていることがわかってきた。

第三章

各年代別の目次をピックアップし、そこからみえてきた変化を年代別に比較した。さらに、その目次から、どのようにしてこの様な変化が起こってきているのかを、性風俗関連記事を主とし社会の動向や法律改正などと照らし合わせながら調査してみた。

第四章

第三章で調査しわかってきたものの中から特に、スポーツ記事と性風俗関連記事の関連性についてを社会事情と共に検証してみた。

第五章

週刊誌の中吊り広告に見る問題点とメディア性・性差別表現のあり方についてを現代社会の問題として調査してみ

た。中吊り広告の過激性差別表現が、社会に与える影響がどのようなものなのかそれをどのように考えていけばよいのかなどを記述した。

結章

これまで、週刊アサヒ芸能の創刊当初から約 50 年分の目次から様々な社会の動向と共に移り変わってきた性風俗の歴史・スポーツなどを年代ごとにピックアップし調査してきた。第一章と第二章では、アサヒ芸能の歴史と芸能面の変化などを調べた。芸能面では創刊当初に比べると、やはり他社との競争が激化したこともあり近年では過激報道といった形で社会問題にまで発展してきたことがわかった。第三章では、創刊当初から現代に至るまでに社会の動向と共に変わってきたことをピックアップし、当時の法律や条令などと照らし合わせながら性風俗事情・スポーツ・暴力団関連記事などを主に調査してきた。そこで、見えてきたものが、昭和三十一年に制定された売春防止法により、それまでのアサヒ芸能の生命線とも言われた性風俗記事が大きく変化してきたということである。スポーツ記事にも少しずつその年代を代表する種目が記事とされてきた。そして、今回私がこの論文の中で非常に考えさせられたことがあった。創刊から 50 年間の間に変わってきた週刊アサヒ芸能の目次(宣伝広告)が社会に与える影響といったところである。週刊アサヒ芸能の目次(宣伝広告)が社会に及ぼす影響である。女性や子供にとってはあまりこの様な過激広告は良いものと言えない。マスコミ各社は性差別表現移管するというガイドラインを持っている。各鉄道会社にも広告掲載の基準を設けている。今の宣伝広告はそのガイドラインを守っているのだろうか。おそらく、大幅に破られているということはないのだろう。その基準がいまいであり、不十分であるがゆえに、過激になっていく報道や表現にマスコミ側も、そして国民側も感覚が麻痺してしまっている。憲法もマスコミのガイドラインも広告掲載の基準も変わっていないのである。私たちの感覚が麻痺し、厳しい目がゆるくなっているのだ。出版社を含めマスコミ各社も危機感をもち、公共の目に触れる自分たちの行動に社会的責任を持ち、自主規制をとして改革に臨んで欲しいと考える。情報を受け取る私たちも、厳しい目と感覚でメディアを読み解く力、メディア・リテラシーを身につける必要があるのではないだろうか